資料館ノート　第84号　　平成23年3月16日発行

江戸庶民の旅と江東④

成田山参詣と江戸出開帳

江東区深川江戸資料館

1．成田山参詣の流行

千葉県成田市にある成田山新勝寺は、関東をはじめ全国から参拝客が訪れる寺院です。特に初詣や節分に賑わい、最近では、国際空港に近いという立地から、外国の方にも有名な観光地となっています。この成田山が観光地として人気を集めるようになったのは、江戸時代中期以降のことでした。同寺の歴史は、天慶3年（940）の開山に始まりますが、近世初期まではほとんど名の知られない寺院だったようです。しかし、元禄14年（1701）に佐倉藩の城主となった稲葉氏の篤い信仰を集めたことから、18世紀初頭以降、その庇護のもとで寺領の拡大と寺格の上昇を進めていきました。また、同年に初めて本尊の開帳を行い、2年後の元禄16年には深川の永代寺で初の江戸出開帳を行うなど、この時期、参詣客を集めるための活動も積極的に繰り広げています。

中路定俊『成田名所図会』安政5年（1858）江東区教育委員会蔵

このような過程を経て、成田山新勝寺は多くの人々から信仰を集めるとともに、名所としての地位を確立していきました。さらに、成田山信仰が特に江戸で受け入れられた要因として、江戸歌舞伎の市川団十郎家の存在があります。団十郎家は代々、成田山を篤く信仰しており、現在でも「成田屋」の屋号を名乗っています。その理由は、子宝に恵まれなかった初代が、成田山に祈願したところ男子を授かったためと言われ、成田山には団十郎家代々が寄進した宝物が今も数多く伝わります。また、初代は、元禄16年の江戸出開帳に合わせて、自作の歌舞伎「成田山分身不動」を演じており、江戸では成田山の不動明王信仰が団十郎人気と一緒になって広まったのでした。

2．十方庵敬順の成田山参詣

成田山信仰が広まるに従い、多くの江戸庶民が成田山を訪れるようになりました。ここでは、江戸時代に成田山参詣を楽しんだ一人として、十方庵敬順を紹介します。敬順は、江戸に住む僧侶で、江戸近郊の名所旧跡を遊歴し、文化11年（1814）に紀行文『遊歴雑記』初編を著しました。その記述によれば、敬順は文化10年と翌11年に、成田山を訪れていることが分かります。ここでは、文化11年2月の旅を見てみましょう（『遊歴雑記』初編中32～39）。

成田山参詣を思い立った敬順は、友人の三田暁烏という人物と共に、2月11日に江戸を出発しました。船橋にある佐渡屋勘兵衛という旅籠に宿泊したところ、夜中から風雨激しく次の日も逗留。そこで、地元の人々から話を聞いたり、土産として玉子を購入したりして過ごします。その後、佐倉城下に立ち寄ったり、酒々井の茶店で煎茶を楽しんだりしながら、14日頃に成田村に到着しました。成田村は、新勝寺の門前町として繁栄していた様子で、敬順も「家居軒を並べ、繁昌にして万弁利なること片鄙とは思はれざりし」と記しています。

新勝寺を参詣した敬順は、「総て堂内外の結構は、花の江戸にも少なからん、作事壮厳、首尾満足して、行届一つとして失なし」と伽藍の豪華さを大絶賛しています。また、同行した暁烏は、敬順によれば「物を誉ぬ人」とのことですが、その暁烏も成田不動には感動したことが記されています。

成田山の参拝客については「参詣群がる事、蟻の行道の如く」と記され、まるでアリの行列のように数多くの人々が参拝していた様子が伝わります。敬順によれば、参拝客の中には、額を地に着けるほど拝んで経を読む者、くじを引き護摩を願う者、お札を授かる者のほか、敬順自身のように信仰心ではなく、旅行として楽しむ者もおり、現在の神社仏閣参詣と似たような様子であったことがうかがえます。敬順の旅の記録から、成田山参詣が単なる信仰の旅ではなく、豪華な伽藍見

学や門前町での買い物、さらには成田に至るまでの行程を一体として楽しむものであったことが分かります。

3．成田山の出開帳と永代寺

江戸庶民には、敬順のように直接参詣する以外にも、成田山と触れ合う機会がありました。それが、江戸で行なわれた本尊の出開帳です。年表に示したように、成田山は、元禄14年から安政4年（1857）の間に計23回の開帳を行なっており、新勝寺で行なわれた居開帳（いがいちょう）を除けば、ほとんどが深川の永代寺で行なわれた出開帳でした。これら頻繁に行なわれた出開帳は、成田山にとって重要な収入源であるとともに、成田山への参詣客を伸ばすための営業活動という意味合いを持っていました。そして、江戸庶民と成田山との出会いの場を提供したのが永代寺だったのです。

江戸時代に行われた成田山の開帳

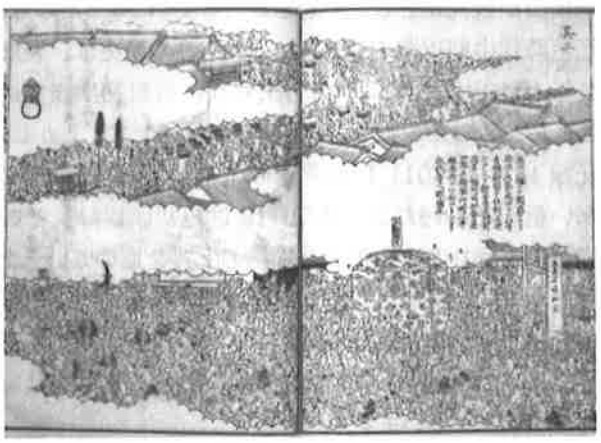
	年	場　所
1	元禄14年（1701）	新勝寺
2	元禄16年（1703）	深川永代寺（富岡八幡宮）
3	享保6年（1721）	下総国ほか巡行
4	享保11年（1726）	常陸・下野国ほか巡行
5	享保18年（1733）	深川永代寺（富岡八幡宮）
6	宝暦元年（1751）	江戸府内ほか巡行
7	宝暦12年（1762）	深川永代寺（富岡八幡宮）
8	明和元年（1764）	常陸・武蔵国ほか巡行
9	寛政元年（1789）	深川永代寺（富岡八幡宮）
10	文化3年（1806）	深川永代寺（富岡八幡宮）
11	文化4年（1807）	新勝寺
12	文化6年（1809）	下総八日市場村見徳寺
13	文化11年（1814）	深川永代寺（富岡八幡宮）
14	文化12年（1815）	新勝寺
15	文政4年（1821）	深川永代寺（富岡八幡宮）
16	文政5年（1822）	新勝寺
17	天保4年（1833）	深川永代寺（富岡八幡宮）
18	天保6年（1835）	新勝寺
19	天保13年（1842）	深川永代寺（富岡八幡宮）
20	弘化元年（1844）	新勝寺
21	安政2年（1855）	新勝寺
22	安政3年（1856）	深川永代寺（富岡八幡宮）
23	安政4年（1857）	新勝寺

※『成田山の歴史』（成田山霊光館図録、1998年）所載の表を元に作成。

永代寺で行なわれた成田山の出開帳が多くの人々で賑わったことは、当時の記録にも記されています。例えば、加藤曳尾庵（かとうえいびあん）『我衣（わがころも）』は、文化11年の出開帳について次のように記しています。

> 又、成田の不動、深川八幡にて開帳。おびたゞしき送り迎いの人数、凡壱里斗続々たり。深川に着は二月廿日也。其日御戸張の金襴を手々に引裂て、守にすると号し頗及狼藉に者少からず。新場の者共是を制し、夫より喧嘩と成、大勢の事ゆへ二、三百人の加勢両方より出、古今の騒動をなし、即死等も有之。四十余人牢したり。いまだ落着せず。

『我衣』は、元水戸藩士で諸国遊歴の後に江戸で医師などを務めた加藤曳尾庵が文化年間（1804～1818）に著した随筆です。ここには、成田山の本尊不動明王像が、深川八幡（永代寺が別当（べっとう）を務める富岡八幡宮）での出開帳のために江戸へ運ばれる様子が記されています。送り迎えの行列は1里（約4km）も続き、中には本尊の行列に飾られた金襴（きんらん）をお守りにしようと引裂く者もいました。その結果、これを制する者たちとの間で喧嘩（けんか）が起こり、40人余りが入牢、即死者も出るほどの騒ぎになったことが記されています。



『成田名所図会』。群集のなか、本尊不動明王像（右下）が永代寺へと運ばれる様子を描いています。

このような騒動が起こるほど、江戸庶民たちに熱狂的に迎えられた成田不動ですが、開帳の結果はどうだったのでしょうか。『我衣』には、次のように記されます。

> 成田不動開帳大繁昌。捧物・奉納もの、凡五、六百両余。（中略）五月十一日終日。古今未曾有の大群集。近年開帳の最第一たる物也。

5月11日まで続いた成田山の出開帳は、「古今未曾有（みぞう）」と評されるほどの参拝客を集め、大成功に終ったのでした。『我衣』には、同年に行なわれた他の寺社の開帳に関する記事も載りますが、「中位の当り」や「どっとせず」と評されるものもあり、すべての開帳が成功したわけではなかったことが分かります。文政4年（1821）に行なわれた出開帳の際、『我衣』には「凡開帳、成田を以て第一とす」と記されており、成田山の人気の高さは群を抜いていたようです。

成田山の江戸出開帳が何度も行なわれた永代寺は、明治に至り、神仏分離令によって廃寺となりました。しかし、出開帳が行なわれた場所は、成田山東京別院の深川不動堂として、現在も東京における成田山の窓口としての役割を果たしています。